



# 日本イスペインヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 12 号 / Boletín Núm. 12

2007 年 9 月 30 日 / 30 de septiembre de 2007

## 事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10

7-pan 大塚 3F (株) ガリレオ

学会業務情報化センター 東京オフィス内

Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364

e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp

ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/>

## 編集部

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学教養学部スペイン語部会

竹村文彦研究室 Tel:03-5454-6437

e-mail:takemura@ask.c.u-tokyo.ac.jp

## 巻頭言：大阪で教えられた 4 人のスペイン人先生

中岡 省治 (関西外国語大学教授・大阪外国語大学名誉教授)

大正 10 年 (1921 年) から関西で外国語の教育・研究に携わってきた大阪外国語大学が、本年の 10 月 1 日をもって大阪大学と統合することになった。大阪外国語大学は、「大正 10 年、大阪の実業家・林蝶子女史 (1873-1945) が、『大阪に国際人を育てる学校を』という理念のもとに、学校設置資金として、私財 100 万円を国家に寄付されたことに遡る。政府は、この寄付金を基に同年 12 月、本学の前身大阪外国語学校 (支那語他 9 語部) を大阪市天王寺区上本町 8 丁目の地に創設した」(国立大学法人 大阪外国語大学概要 平成 19 年度版) ことに始まる。

西語部も設立時の 9 語部 (支那語、蒙古語、馬來語、印度語、英語、佛語、獨語、露語、西語) の 1 語部として、その歩みを始めている。

この西語部には、設立の当初から、学科長の佐藤久平先生や国沢慶一先生などを助けて教鞭をとられたスペイン人の先生方もおられた。そこで、大阪外国語大学がその門を閉じるこの今、とくに、外国人教員としてその存在を印された 4 人の今は亡き先生方への思い出を新たに、先生方へのオマージュの一端とできればと思う。

まず最初に、西語部設立時に外国人教師として赴任されたのが、ミゲル・ピサロ先生 (Miguel Pizarro Zambrano 1897-1956) であった。先生は、ウエルバ県アラハル (Alájar) で生まれ、1917 年グラナダ大学哲文学部を卒業されている。文学のみならず言語にも鋭い感覚の持ち主であったようで、すでに卒業時には、ラテン語、ギリシャ語、アラビア語、ヘブライ語で優秀賞を受けられている。スペイン現代文学を代表するフェデリコ・ガルシア・ロルカとは早くからの友人であり、文学サークル「エル・リンコンシリョ」の同人でもあった。ここで、後の時代を代表するような詩人、芸術家のアルベルティ、サリナス、ホルヘ・ギリエン、ダリ、ブニュエル、などとも交友を深められた。「エル・ソル」紙の記者を辞して 1922 年に来日し、1933 年まで、西語部の初代外国人教官として教鞭をとられた。ピサロ先生は、滞在中に日本語をマスターされ、仏典、歌舞伎、能楽、浄瑠璃、小

説などにも大きな関心を寄せ、それが後年の先生の詩や劇作品に、大きく影響を及ぼすことになっている。先生を思い起こして、教え子であった角田理三郎先生が、頭脳明晰、日本語の上達も目をみはるばかり、「私達が3年になると志賀直哉の『暗夜行路』をクラスで読まれて、私達はその訳を命ぜられたものだが、我々皆之には暗夜行路の思いをした。」(マ)、と書いておられる (*Más y Menos* 17号、1957年)。

先生の大阪外国語学校での親友であった、オレスト・ド・ブレトネル先生も、「ある時は神戸の松竹劇場へ左団次・猿之助をわれわれ夫妻と共にピサロも見に行ったが猿之助の保名モノグレイ感激して「サンタマリヤ」と大声で叫んだ。猿之助が思わずこちらを見たことも思ひ出す。」(マ)、と書き残されている (上記 *Más y Menos* 17号)。

在日中 (1931年) にスペイン領事館文化担当官にも任官されていた先生は、1933年ルーマニア、ブカレストに転勤されることになり、ブカレスト大学でも教鞭をとられることになった。

その後は共和国政府の外交官として、1937年にはサンフランシスコ総領事を務められ (Fernando de los Ríos の推薦による)、ピカソの『ゲルニカ』のアメリカ移送に関する交渉も担当されている。1939年にスペインに帰国されるも、内戦勃発のため徒歩でピレネーを越えて、フランスの Le Boulou に脱出し、ここで結婚間もない奥様と再会され、お二人はアメリカに向かわれることになった。それ以後はニューヨークに住み、ブルックリン・カレッジで教鞭をとられるが、再度スペインの地を踏むことなく、1956年この地で逝去された。

なお、ピサロ先生の著作としては、ご息女 Águeda Pizarro de Rayo 女史の手になる、Miguel Pizarro, *Poesía y teatro* (Introducción de Águeda Pizarro. Prólogo de Jorge Guillén), Diputación de Granada, Granada, 2000がある。

国沢先生によれば、設立当初から大阪外国語学校でスペイン語を講じられたもうお一人の先生が、ペドロ・P・ビリャベルデ先生 (Pedro P. Villaverde 1887-1960) である。マドリードのコンセルバトリオ、ピアノ科を卒業後しばらくは、貿易商としてのお仕事をされていたが、1917年に来日以降は、神戸に住みピアノ教授に専念され、原智恵子や田中園子らの名ピアニストを育てられた (*Más y Menos* 20号、1960年)。大阪音楽学校で教えられたこともあったと聞いている。その後一時期、先生は大阪外国語学校を離れられていた。しかし、戦時中や戦争直後の困難な時には、再度、要請にこたえて大阪の教壇に復帰されている。同時にまた先生は、1952年からは神戸大学経済学部にも出講され、スペイン語と外国事情を担当されていた。大阪にも、再度、非常勤講師として出講される予定のところを、残念にも1960年に不帰の客となられた。

残された蔵書を拝見するために、神戸のお宅にうかがう機会があったが、購入されたばかりの Valbuena Prat の文学史が、お部屋の本棚にずらりと並んでいたのが何かしら悲しかった。

ホセ・ルイス・アルバレス-タラドリス先生 (José Luis Álvarez-Taladriz 1910-1995) は、バリャドリード市に生まれ、1931年にマドリード大学法学部を卒業されている。1932年に論文“Maquiavelo en España”で法学博士号を取得され、1933年には、ポルドー大学、グッティンゲン大学に留学されている。1935年に大阪外国語学校外国人教師として来日された。スペイン内戦も近く、日中戦争勃発など、世界情勢騒然たる時代で、先生は一時期、共和国代理公使を務められたこともあったが、1946年からは学究の世界に戻られ、

1949年以降は大阪外国語大学外国人教授として、まさしく研究と教育に専念されたのであった。

我々がスペイン語の教えを受けた昭和30年代は、スペインや中南米に関する情報など、ほとんど何もなかった。しかし、いつも短波で素早く世界の情報をキャッチされていたのがアルバレス先生で、我々学生も、先生のイスパニア語学科での存在の大きさを感じていた。ジャンカン著・会田由訳『スペイン文学史』（白水社、1956年）の出版とほぼ同時に、我々はアルバレス先生から、ご自身の謄写版刷りスペイン語訳で、授業を受けたのを覚えている。先生は、文化祭のスペイン語劇の作品選定から台詞の録音までなさって、学生の練習にも立ち会われていた。イスパニア語学科には、当時、西語部会誌 *Más y Menos* があったが、ここに掲載すべき論文やそのテーマなども、毎年ことこまかに指導されていた。

先生は、大阪外国語大学以外でも、天理大学、神戸市外国語大学、神戸大学経済学部、大阪大学でも教鞭をとられた。天理には外国語学校の時代（1941年）から連続して52年間出講された。1965年からは英知大学イスパニア文学科教授として、文学科の設置とその後の発展とに大きく貢献されている。

アルバレス先生はまた「16・17世紀日西関係史」の分野では世界的にも高名な研究者であり、イエズス会、フランシスコ会なども、早くから先生の業績を高く評価していたと聞いている。最近も、英知大学と大阪外国語大学の2図書館からの協力もあって、先生の紀要掲載論文の3分の2が上智大学に集められ、内外からの照会に応える態勢が整えられたようである。

アルバレス先生はまた、在神戸・大阪イスパニア国名誉副領事をも務められ、イスパニア人としての誇りを全うされた。1959年から1990年までの長きに亘ってのお仕事であった。

先生には、*Estudios Hispánicos*, 7 (1980) (大阪外国語大学イスパニア語学科研究室) と『アルバレス先生を偲ぶ』（英知大学西文科三〇年の会編、英知大学、1995年）とが捧げられている。

非常勤講師ではあったが、ドミニコ会司祭で、皆から敬慕されたドミンゴ神父さん (Domingo Ledesma Hernández 1905-1994) を忘れることはできない。1930年来日され、1960年からおおよそ20年間、大学が箕面に移転するまで教鞭をとられている。学生には絶対に日本語を使わないで、自分のことばを学生が理解するまで、何度も辛抱よく、ゆっくりと繰り返されていた先生の姿が目につかんでくる。ドミンゴ先生にスペイン語を習って、それでスペイン語が好きになったという学生が何人もいた。学生の研修旅行にもよく同行されて、皆と一緒に座敷に座り、楽しそうに食事をされていた。食べ物に好き嫌いのない方だったが、戦時中のこと、四国で自由を制限された生活のなか、食糧難も重なって当時はよくダイコンを食べさせられたので、ダイコンだけは願い下げだと、よく言っておられた。お漬物やお茶漬の大好きな先生だった。

教えを受けた先生、受けなかった先生、もっともつと書きたいが紙面を超えてしまっている。改めて4人の先生について記憶をたぐってみると、大先輩がおっしゃった、「スペインは実に得難い先生方を日本に送ってくれた」ということばを、ただただ実感するばかりである。今は、亡き先生方の教えを思い起こし、それが新しい研究・教育の場で、さらに大きく結実してゆくことを願って、つたない一文を終えることにしよう。

(2007年7月29日)

## 亡き長南実先生を偲ぶ

本田 誠二（神田外語大学教授）

去る平成十九年一月一日に、日本イスパニヤ学会の元理事長で、元東京外大教授（後に清泉女子大に移られた）であられた長南実先生が八六歳で急逝された。私がこの知らせを受けたのは、一月も終わろうとしていた頃で、大きなショックを受けた。師の警咳に最後に接してからはや五、六年も経っていただろうか。めっきりお会いすることが少なくなっ  
てはいたものの、著書をお送りするたびに温かい励ましを戴いていたので、てっきりお元気なもの  
と勝手に解釈していた自分がうかつであった。ご挨拶もできぬままお別れすることとなろうとは、私は決して先生の一  
番弟子というわけではなかった。大学四年間と大学院二年の計六年間をお世話になったものの、むしろ出来の悪い不肖の弟子であった。しかし、今思うとずっと先生の後ろすがたを追ってやってきたように思う。というのも、大学生のとき先生から受けたスペイン文学史の授業を、今では自らが奉職している大学でやっているし、スペイン古典文学の研究を志して、今なおこつこつと研究と翻訳をやっているのも、大学院時代『エル・シードの歌』や『良き愛の書』の原書を、先生の文学演習の授業で精読したことがきっかけであった。

以前から先生の『ドン・キホーテ』への思い入れの深さは語り草となっていた（マレーで英軍の捕虜となっていたとき、『ドン・キホーテ』を読んで心の支えとした、とか）が、私もまた、そうした先生に影響を受け『ドン・キホーテ』の面白さに取り憑かれた。爾来セルバンテス研究者の端くれとして、今日に至っている。先生にはあのような物静かで謙虚なお人柄からは想像もつかないような、学問的な厳しさがあつた。私たち学生に対して、ごまかしや曖昧な解釈をすることを決して許さず、厳密かつ忠実にテキストを読み取ることの重要さを叩き込んで下さつた。先生のそうした自己に厳しい学問的姿勢を如実に反映しているのが、名訳『プラテロとわたし』や『エル・シードの歌』であり、翻訳史上の金字塔ともいべきラス・カサス『インディアス史』（全五巻）の本邦初訳である。私がいつも目標としてきたのは、先生の残された、こうした卓越した古典文学の翻訳である。立派な研究者と立派な翻訳者が両立していたのが長南先生であった。

先生の死はあまりに急な知らせであつたため、とりあえず長南先生から薫陶を受けた教え子たちが呼びかけ人となつて、三月九日に（先生が長年、協会理事を務められたという縁で）日本スペイン協会で、先生とゆかりの深い大学関係の方々による「偲ぶ会」を開こうということとなつた。協会のご尽力で、ご遺族を交えての、小規模ながらも心温まる会を開くことができたことは、とてもよかつたと思つている。とりわけかつての同僚であつた原誠先生から、長南先生夫妻が世界一仲の良いご夫婦であつたとの秘話が披露され、参列者一同が深い感動に包まれた。未亡人の吉子様は今年八〇歳で、ご自分も二年ほど前に体調を崩され、治癒されたとはいえ声不自由で、無理な身体をおして参列された。ご長男豊様のお話では、先生は昨年十一月下旬に胃癌を宣告され、奥さまが近くのホテルから毎日、看病に通われたとのことであつた。しかしそのときまで、本人を含めご家族は誰も病気に気づかず、また気づいた後も、先生は奇跡的に痛みを感じることはなかつたとのことであつた。私たちはこうした話を伺つて、先生が一ヶ月足らずの闘病生活の末、苦しま

れることなく安らかに逝かれたことを知って、心救われる思いがした。父は最期まで自己を失わず、孤高の人でありました、というご長男から伺った言葉が、今でも私の心に深く刻み込まれている。謹んで長南先生のご冥福をお祈りいたします。

## 長南実先生のご業績

杉山 晃（清泉女子大学教授）

長南先生はじつに多くのすぐれた仕事を遺された。とりわけ思い出深いもののひとつは、東京外国語大学時代に先生が手がけられていた『邦訳 日葡辞書』（岩波書店、1980）である。原典からコピーした項目をひとつひとつノートに貼り、それを丹念に調べあげ、綿密に翻訳されていた。先生の研究室の書棚に並んだたくさんのノートや、それを埋める伸びやかな筆跡がいまも目に焼き付いている。

イエズス会の宣教師が編纂し、1603年に長崎で刊行されたこの日本語辞書を、先生はポルトガル語から日本語に訳された。吉利支丹語学や国語史の第一人者であった土井忠生先生や森田武先生との共同作業であった。室町時代や安土桃山時代の日本語の発音や意味、あるいは生活風俗などもわかるので、さまざまな分野の研究になくはない書物となっている。現在では日本のほとんどの大学図書館に所蔵されており、日本だけでなく、海外の研究者もその恩恵にあずかっている。

この日葡辞書に勝るとも劣らない先生の大きな業績をもうひとつあげるとすれば、やはりラス・カサスの大著『インディアス史』（岩波書店、1981-1992）の全訳だろう。これには十数年の歳月を費やされた。東外大から清泉女子大に移られてからもこつこつと翻訳をつづけられ、大航海時代叢書の5冊分、合計で4千ページ近くを訳し終えられたのは退職されてから2年後だった。

その圧縮版『裁かれるコロンブス』（岩波書店、1992）のあとがきには、先生はつぎのように記されている——「インディアスの発見・征服史と自然・文化誌の両面を幅広くカバーしているだけでなく、激越な感情をあらわにして、執拗なまでに論難を繰り返しているこの特異な歴史書を、一個の文学作品としてその文体を尊重しながら、一言一句もゆるがせにしないで全訳を試みるということは、おのれの非力を顧みない無謀のきわみであった。」

しかしながら持ち前のねばり強さで、みごとになし遂げられたこの困難な事業は、「近年日本スペイン学における最大の業績である」とも評価されている。「一言一句もゆるがせにしない」という先生の執念、その翻訳の根本精神を4千ページにわたってまざまざと見せつける金字塔であることは間違いない。

とはいえ、先生がほんとうに楽しまれた翻訳というのは、やはりそうした「辞書」や「歴史書」よりも、ロルカの『血の婚礼』やヒメーネスの『プラテローとわたし』あるいは『エル・シードの歌』だったのではないかと思う。

『プラテローとわたし』は名訳との誉れが高く、小学生からお年寄りまでに愛読されてきた。冒頭の一節を朗読された先生の声はいまもなつかしく耳の奥で響く——「プラテロー

口は、小さくて、ふんわりとした綿毛のロバ。あんまりふんわりしているので、そのからだは、まるで綿ばかりでできていて、骨なんか無いみたいだ…」

この詩集が主婦の友社から最初に出たのは1971年。その後、岩波少年文庫に入り、版を重ね、現在は岩波文庫にも収まっている。そのたびごとに手を入れられ、ますます質の高い翻訳にされた。2001年の岩波文庫版ではさらに、多くの注も加えられた。

最晩年の仕事のひとつ『エル・シードの歌』（岩波文庫、1998）でも120ページあまりの注を施され、スペイン最古の武勲詩を読みやすいかたちにして遺して下さった。これは先生が退職後に、数年にわたって社会人向けのクラスで講読された成果でもある。最後までスペイン文学に深い愛情を抱きつづけ、綿密で粘り強い、じつにいてねいなお仕事をされた長南先生である。

### 日本イスペニヤ学会 2006年度第3回理事会議事録

2006年10月21日（土）11時～14時

同志社大学新町キャンパス臨光館2階 R202

出席：稲本健二、片倉充造、川上茂信、杉山晃、高垣敏博、高橋寛二、竹村文彦、  
田尻陽一、西川喬、宮本正美、三好準之助、柳沼孝一郎、柳原孝敦、山崎信三  
監査：立林良一、寺崎英樹、（庶務委員：伊藤ゆかり、前田明美）  
（ガリレオ：柏山恵子）

欠席：佐藤邦彦（委任状あり）、清水憲男（海外滞在中）

#### 【報告事項】

特になし

#### 【審議事項】

##### 1. 議事録確認

- ・2006年9月24日第2回理事会議事録について、機関誌 HISPÁNICA の印刷依頼先を弘学社に決定した理由を加え、承認された。
- ・メールによる臨時理事会審議議事録（2006年第2回理事会後10月16日現在）について、修士論文の扱いに関する具体的意見は報告事項として省略し、承認された。

##### 2. 新入会員の承認

次の新入会員の入会が承認された。

平井素子 HIRAI, MOTOKO Universidad de Alcalá, D スペイン

##### 3. 今年度（2006年度）大会について

稲本理事より、研究発表セッション C2 の2番目の発表は、発表者の木村琢也会員が欠席のため取りやめることが報告された。

##### 4. 会計報告案について

- ・2005年度については宮本理事の提案どおり承認され、監査2名の承認を受けた。

- ・今後の書式について、「事務手伝い給与」を「事務手伝い経費」に、「会計監査委員」を「会計監査」に改めることが承認された。

#### 5. 2007年度予算案について

- ・2007年度については宮本理事の提案どおり承認された。
- ・今後の書式について、収入に前年度繰越金を加えること、収支差額の△印は削除すること、また隔年で発生する項目も加えることなどが提案され、ガリレオを通じて修正することが確認された。
- ・大会開催費用の上限は30万円であることが確認された。

#### 6. 会報（次号第11号）、HPについて

- ・竹村理事より、会報は年内に発行予定であり、以下の内容を準備中であることが報告された。  
内容：巻頭言（野谷文昭会員）、スペインの現況（清水憲男理事）、書評3件、CANELAの活動、理事会報告、大会報告、会計報告、奨励賞
- ・対外的広報活動の観点から、大会報告等は従来どおり HISPÁNICA にも掲載することが確認された。

#### 7. HISPÁNICA について

##### (1) 投稿分野

- ・今後はスペイン語教育を加え4分野とすることが承認された。すでに本学会においても、また他学会でも独立した分野として認められていること、また学部でも高校スペイン語教員免許取得のための科目として存在することなどによる。
- ・査読は言語分野の担当とし、教育を専門とする会員に依頼することが確認された。

##### (2) 投稿を希望する新入会員の扱いについて

- ・投稿者は投稿締切り日までに理事会で承認を受けた会員であることを条件とすることが承認された。
- ・編集委員会は、新旧会員を問わず投稿者が会員であることを確認し、会費未納者に対してはガリレオが通常どおり督促を行うことが確認された。
- ・会費の支払いを厳格化するために投稿規定を訂正するか否かについては、今後検討することが確認された。
- ・HISPÁNICA の編集後記に会費の支払いを促す文面を加えることが田尻理事より提案された。

##### (3) 第50号掲載論文の承認

- ・本事項と次の(4)は別議題として審議することが確認された。
- ・多数決（賛成9、反対4、棄権1）により、第50号掲載論文が承認された。

##### (4) 修士論文に基づく投稿論文の扱いについて

機関誌への投稿・掲載について次の意見が出された。

「賛成」：一著作権法では修士論文は公刊物とは見なされない。

—複数の大学では修士論文は非公開扱いであり、閲覧可能な場合でも別途手続きが必要となる。入手の困難さを考慮すれば公刊物とは言い難い。

—修士論文を排除することは著作権法に抵触しかねない。

—著作権があれば執筆者は閲覧を拒める。閲覧を拒んだ修士論文を改良し

たものが「加筆修正した」投稿論文であれば、それは独立した論文と認められる。

—圧縮した論文も独立した論文として成立し得る。

—むしろ大学は学会誌への投稿を奨励し、修士論文が掲載されるレベルに達するよう指導するべきだ。

—大学院生も会員であれば投稿の権利があり、受入れは若手の育成に資する。

—他者は修士論文から引用することはできない。研究に貢献するためには修士論文は公刊する必要がある。

—他学会では修士論文に基づいた投稿論文である旨を明記した例がある。

—「未公刊」についての社会的解釈に当学会も合わせるべきである。

「反対」：—修士論文は公刊物に準ずる。その理由は次のとおりである。

・既に評価を受けている。

・業績としてカウントされる。

・アクセスが可能である。

—修士論文に「加筆修正」したものは修士論文と同等であり、学会のレベルに相応しくない。

—たとえ修士論文をベースに加筆したとしても、さらに「発展」させた新しいものでなければならない。

—修士論文であれ博士論文であれその一部分は独立した論文とは認められない。

## 8. 奨励賞

第 50 号掲載論文の承認を受け、編集委員会が対象者を選考し理事会に諮ることが確認された。なお第 49 号は 2005 年 12 月 1 日付で発行されているため、本年度の選考の対象にはならない。

## 9. 2006 年度総会議案

稲本理事の提案どおり承認された。

## 10. 次回大会

発表を希望する新入会員の扱いについては、次回理事会に諮ることが確認された。

## 11. その他

### (1) 賛助会員ではない出版社が大会で展示を希望する場合について

今回、大会前日に賛助会員ではない出版社から展示の申込みがあった。その対応については基本的に積極的に受入れること、速やかに賛助会員となる旨を文書で明示してもらうこと、また会場使用料はないが謝礼を受け取る慣例である旨を口頭で説明することが確認された。

### (2) 片倉理事より、分野ごとに研究会を発足させる旨の提案がなされ、今後メールによる臨時理事会に諮ることが確認された。

以上

## 日本イスパニヤ学会 2006 年度総会議事録

2006 年 10 月 21 日 (土) 14 時 05 分～14 時 30 分

同志社大学新町キャンパス臨光館 2 階 R201

1. 開会：稲本理事より開会が宣言された。
2. 議長選出：長谷川信弥会員（大阪外国語大学）が選出された。（拍手で承認）
3. 報告
  - (1) 理事および会計監査の紹介が高橋会長よりなされた。
  - (2) 新入会員の紹介が高橋会長よりなされた。
  - (3) 会費の支払いについて  
ガリレオにより順調に代行徴収されていることが高橋会長より報告された。
  - (4) 次回大会  
2007 年 10 月 27 日 (土)、28 日 (日) の日程で清泉女子大学が開催要請を受諾したことが高橋会長より報告された。
4. 議事
  - (1) 会長兼代表理事の承認（会則第 9 条 1 項）  
高橋会長兼代表理事の就任が拍手により承認された。
  - (2) 会計報告（会則第 13 条）  
宮本理事より 2005 年度の会計報告がなされ、承認された。
  - (3) 監査報告  
立林監査より会計報告に問題ない旨の報告があり、了承された。
  - (4) 2007 年度予算案  
宮本理事の説明による原案どおり承認された。
  - (5) 『HISPÁNICA』について  
田尻理事より、第 50 号には 20 本の投稿があり査読の結果 12 本（論文 8 本、研究ノート 1 本、書評 3 本）の掲載が決定したことが報告された。
  - (6) 奨励賞について  
田尻理事より、HISPÁNICA が編集のため未検討であることが報告された。
  - (7) その他  
次のとおり、米田富彦会員からの質問とそれに対する回答がなされた。  
米田会員一以下の内容で高橋会長宛に送付した内容証明郵便への回答を求める。
    - ・本大会への出席要請通知を受け取った。
    - ・そこには理事・編集委員一同の名で、自らが過去に機関誌へ投稿した論文に対する不適切な言及があった。
    - ・精神的苦痛を受けたため刑事告発を検討中である。
    - ・理事会の真意と責任の所在を明らかにすることを求める。高橋会長—10 月 17 日付で内容証明郵便を確かに受け取った。本大会については「出席要請通知」ではなく「大会開催案内」を業務委託先のガリレオから一斉に発送している。そこに個人的なコメントを書き加える余地はない。したがって米田会員の発言は事実誤認であると判断される。  
米田会員—公的に否定されたことから私的行動であったと理解し、調査の後しかるべき行動にでる。
5. 閉会 稲本理事より閉会が宣言された。

## 日本イスペインヤ学会 第 52 回年度大会 会計報告 (会場校関係)

【収入】 (単位：円)

大会開催費用予算	300,000
協賛金 (書籍展示をした書店・出版社から)	80,000
<b>収入計</b>	<b>380,000</b>

【支出】

ゲストスピーカーへ謝礼 (2人)	200,000
ゲストスピーカー (1人) の交通費	30,000
アシスタントへ謝礼	36,400
大会運営者食事	26,000
大会参加者・運営者茶菓等	37,140
懇親会費用	35,840
振込手数料	210
郵送料	80
<b>支出計</b>	<b>365,670</b>

<b>収支差額</b>	<b>14,330</b>
-------------	---------------

### 【学会報告】

#### Encuentro de Hispanistas Asiáticos の報告

小川 雅美 (大阪大学大学院)

2007年3月5日、6日の両日、Cantabria 県 Comillas において、Encuentro de Hispanistas Asiáticos が開催されました。主催者の Campus Comillas 財団は、スペイン語の研究、教育、普及を目的として設立された非営利団体です。本会合は、世界各地におけるスペイン語教育の現状と需要を、当事国の関係者との対話を通じて知り、同財団が今後活動を展開するための指針を得ることを狙いとした諸活動の一環でした。その最初の対象地域としてアジアが選ばれたのは、今後スペイン語教育の需要拡大が見込まれるからとのことでした。一方、参加者にとっては、アジア4カ国(中国、韓国、インド、日本)のスペイン語教育の実情を話し合い、スペイン人の参加者も交えて共通理解を深め合う貴重な機会となりました。

本会合は、マドリッド自治大学の Taciana Fisac 先生、元スペイン大使の林屋永吉先生、上智大学の清水憲男先生の主宰で進められました。主な参加者は、インド、韓国より各2名、中国と日本より各4名で、いずれもスペイン語学科を擁する大学の教員でした。日本からは、当学会会長の高橋寛二先生、福嶋教隆先生、木村琢也先生および小川雅美が出席しました。また、スペインからの講演者として、コンプルテンセ大学の Sánchez Lobato 先生らが参加されました。

初日は、Cantabria 州知事同席の開会式に始まり、最初のセッションでは、最近のスペイン語教育について、2名のスペイン人より発表がありました。次のセッションでは、ま

ず、林屋元大使が日本とスペインの文化交流の歴史についてスピーチをされました。引き続き、アジア4カ国より代表1名ずつが、自国のスペイン語教育についての現状や問題点などを報告し、それに対する質疑応答がありました。日本については、福嶋先生が、大学専門課程としてのスペイン語教育の概要、活発な研究活動と辞書の出版、そしてNHKスペイン語講座の観点から紹介されました。2日目は、Campus Comillas 財団設立の経緯と今後の計画についての説明があり、最後のセッションでは、アジアのスペイン語教育において何が求められているか、同財団に何を希望するかについて、全員で話し合いが行われました。

参加各国の言語、社会、文化には共通性が乏しく、スペインとの関係も異なりますが、教授法に関しては、コミュニケーション的な活動と文法訳読が、それぞれの国や大学の特色やニーズに合わせて取り入れられていることが明らかになりました。そして、今後スペイン語教育を、特に質的により充実させていく必要があるという点について、各国で一致しました。中でも、中国やインドのようにスペイン語学習者が急増している国々では、それが緊急の課題のようでした。

同財団は、教皇庁大学の旧校舎を利用した大学を開設すべく、現在準備を進めています。この校舎を始めとする文化遺産の見学も含め、会合の開催期間を含む3日間参加者が同一行動でしたので、様々な話題で交流を深めることができました。さらに、この会合が参加各国同士の双方向的な対話の場となったことは、大変意義深いと言えるでしょう。本会合を契機として、今後、アジアにおけるスペイン語の教育や研究、そして相互協力がさらに活発になることが望まれます。

## 【書評】

岡田裕成・齋藤晃『南米キリスト教美術とコロニアリズム』

(名古屋大学出版会、2007年)

木村 秀雄 (東京大学大学院総合文化研究科教授)

本書は、美術史と文化人類学を専門とするふたりの研究者による長年の共同研究の成果である。美術史家である岡田裕成(おかだ・ひろしげ)は、エル・グレコ、スルバランといったスペイン人による絵画の専門研究者でもある利点をいかして、南米キリスト教会や絵画についての研究を進めてきた。また、齋藤晃(さいとう・あきら)は南米のキリスト教の宣教とくに、ボリビアのベニ県のモホス平原のイエズス会ミッションの歴史人類学研究を、現地における長期のフィールドワークと一次文献資料の解読を通じて続けてきた。

本書は、序「植民地美術」を問い直す、に続いて第1章 植民地体制下の美術、第2章 植民地的ビジョン—アンデス聖堂装飾の表象世界、第3章 精神的征服と美術、によって構成され、終わりに、によって締めくくられている。また、第1章は、I 南米植民地美術の成り立ち、II 先住民社会の再構成、に分けられている。序、第1章I、第2章、終わりに、を岡田が、第1章II、第3章、を齋藤が、分担して執筆している。

この書の最大の特徴は、美術史家である岡田によって、キリスト教美術に関する緻密な専門的研究が行われると同時に、人類学者である齋藤によって、南米大陸の肉体的・精神的征服のあり方、特にキリスト教の布教の特徴と美術との関連へと論旨が拡大され、美術をとおした南米キリスト教の包括的研究となっていることである。本書は、南米キリス

ト教美術に関する画期的な研究であると評価できる。数多くの写真・図版が含まれ、個々の教会堂（聖堂）についての解説が資料として掲げられているなど、現地についての知識のない読者にもわかりやすい内容となっている。

私がこの本を読んで最も共感したのは、先住民たちがキリスト教美術に積極的に関与したことを重視しながらも、その成果である美術作品に征服前の先住民文化が反映しているなどと安易に結論づけていないことである。これまで、クスコ様式などの名で呼ばれる南米植民地キリスト教美術のモチーフや様式に先住民文化が現れているなどと言われてきた。しかし、岡田は、先住民による積極的な関与をそのような形でとらえない。キリスト教美術の様式や技法はヨーロッパのものそのものであり、そこに先住民性を見出すことは難しいのである。また齋藤の議論においても、キリスト教の布教は「暴力的」なものであり、先住民宗教の要素を容認するようにはななかったことが明らかにされている。

岡田と齋藤がみる先住民の積極的関与は、先住民がヨーロッパの技法を自らのものとし、それによって美術制作の場面に自ら参画していく、というものである。この視点は、岡田と齋藤と共同研究を実施したことがある中村雄祐らによる、文書による土地などに関わる権利関係の確認という、植民地や共和国の政治体制がもつ公的手段を、識字能力の獲得や古文書の探索を通して先住民が自らのものとし、訴訟への参画や権利主張の手段としたという研究と共通している。

南米大陸におけるヨーロッパによる支配の圧倒的な力を、美術をとおして確認すると同時に、そのような状況における先住民の参画のあり方を説得的な形で提示した本書は、植民地体制の支配下における南米のキリスト教美術や先住民文化についての好著であり、数多くの読者を獲得することを希望する。

## 【書評】

G・ガルシア＝マルケス『コレラの時代の愛』（木村榮一訳、新潮社、2006）

山辺 弦（東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC）

恋の熱情に浮かされ苦悶する息子を案じて、母親は口癖のように「うちの息子の病気はたった一つ、コレラなのよ」（p. 317）と呟く。その勘違いはしかし、完全に正しい。病いと愛は時に同義であり、これはまさにそうした愛の物語であるからだ。

1985年、ガルシア＝マルケスはノーベル賞受賞後初となる長編小説を発表した。本作 *El amor en los tiempos del cólera* は、19世紀的リアリズムの体裁を取りながらも、その器の中ではいつも通り、このコロンビアの語り部一流の豊かな挿話の山が横溢し、比喻やユーモアを交えた巧みな文体が私達を楽しませてくれる。それらが語るのは、他の男の妻となったかつての恋人フェルミーナを愛し続け、叶わぬその愛に人生を捧げながら、51年9ヶ月と4日という気の遠くなるような時間を経て、彼女の夫が死んだとき再び永遠の愛を告白する男、フロレンティーノ・アリーサの物語である。

常套句的なレットルの通りに、これを究極の純愛小説として読んでも全く構わない。しかしその骨格の中には、繰り返される内戦や階級社会などの歴史的・政治的背景、舞台となる都市の変遷、過去や記憶の問題、運命に翻弄される人生の悲喜劇や老いあるいは死といった、滋味も風味も豊かなスープの取れる精髓が詰まっっていて、絶えざる再読の喜びへと読者を駆り立てる。純愛という概念も一筋縄でいくものではない。愛に飢えたフロレンティーノは、永遠の貞節を誓いながらも622人も女達とベッドを共にするのだし、彼に

対する女達の様々な愛の形、フェルミーナが夫フベナルと長い結婚生活の中で得る絆など、愛という主題は幾重にも多義化されている。

それでもフロレンティーノの愛が主役足りうるのは、全てを捧げるべきものとしていつまでもそこに在り続けるという、ただそれだけの、だがあまりにも美しい理由によって、それが病いあるいは狂気としての位相を獲得するからだ。半世紀越しの愛の告白は、狂気の沙汰としてフェルミーナに断固拒絶されてしまうが、ただ彼女のためだけに生きてきた男は、人生の全経験を注ぎ込んで以前とは全く異なるスタイルの恋文を送り続ける。若い頃の情熱ではなく、深い知恵と含蓄に満ちた手紙に、老いた女は共感し、心を動かされる。二人はそれぞれの人生を経て来たことでついに互いを見出し、病は感染するのである。

「生きていても半分腐っているような」(p. 78) 老人同士の恋は、非常識で、「汚らわし」(p. 465) くさえあるという周囲の偏見を押し切り、二人は逃避行の船旅に出る。それは、コレラの感染を、そして愛という病を表す黄色い旗を掲げることで、外界との接触を断ち、ついに何処にも行き着くことなくいつまでも海上を漂う決意へと至る、「狂気の旅」(p. 498) である。互いの老いの匂いを感じつつ、骨ばった手を握り合い、死を間近なものとして感じながらも、むしろ二人はこの先生き続けていくことに希望を抱き始める。二人の姿に船長が「限界がないのは死よりもむしろ生命ではないだろうか」(p. 502) と気付き、小説を閉じる簡潔な、しかし忘れがたい一言を恋する男が口にする時、狂気の愛はまさにそれが病いであるがゆえに、生が死を、愛が時間を、人生が運命を越え出てるそんな瞬間を、文学の中に永遠に結晶化させるのだ。

本作の翻訳が出来るのは、実に原著の出版以来 21 年ぶりのことだ。だが今や日本の読者はフロレンティーノにならって、ついに出会えたこの小説に変わることはない愛を誓うことができる。本作のチャーミングな魅力は、翻訳者の木村氏の言うとおり、現実以上に作品にのめりこんで、作品自体を生きる読者＝リズールにこそふさわしい。これを日本語で可能にしているのは、もちろん氏の巧みな訳業の賜物である。心よりの敬意を表しつつ、一人でも多くの読者がこの物語と出会うことを望みたい。

## 【書評】

寺尾隆吉『フィクションと証言の間で：

現代ラテンアメリカにおける政治・社会動乱と小説創作』

(松籟社、2007 年)

井尻 直志 (関西外国語大学)

本書は、二十世紀のラテンアメリカにおける歴史的事件や社会状況と深く関わる形で創作された小説を、その政治的側面に焦点を当てて論じた研究書です。文章の明解さ、論点の明確さ、論の運びの明晰さに助けられて、一気に読み終えることができました。研究書や論文の類いは、多少は読んできた積りですが、なかなか面白く読めるものは少なく、仕事柄、自分の論文の何かヒントになることはないか、傍証に使えるものはないかと、さもしい根性で、仕方なく読み進めるものが多い中、最後まで楽しく読むことができたのは、おそらく一般の読者をも想定した啓蒙的な語り口とともに、「対象を明確に限定することによって、不必要な脱線を避け、首尾一貫した議論を展開することが可能になろう」と著者が「序章」で述べている通り、〈テーマ〉(政治と文学/証言とフィクション)と〈分析対象〉(メキシコ革命小説/ロムロ・ガジェゴスの『ドニャ・バルバラ』『カナイマ』

／アレホ・カルペンティエールの『この世の王国』『失われた足跡』／ロア・バストスの『人の子』／ガルシア・マルケスの『大佐に手紙は来ない』／フリオ・コルタサルの「ソレンティナーメ・アポカリプシス」「グラフィティ」が、明確に限定されているからだと考えます。そして、さらに、＜分析手段＞（アレゴリー／象徴化／シンボル）と＜思考方法＞（二項対立／弁証法）が最後までぶれることなく議論が進んでいくところに、この書が極めてクリアな印象を与える要因があるように思えます。アレゴリーやシンボルをめぐって作品を分析する中で、小説が同時代の社会的な出来事とどのように切り結んでいたのかを考察するという試みは十分に成功していると思います。あえて何か批判めいたことを言うとするならば（著者は「あとがき」で叱責は望まない旨記されていますが、これは決して叱責ではありません）、「結論」で、シンボリック・リアリズムとコルタサルの幻想小説を作者と読者の関係を媒介にして結び付けているのは、見事ではありますが、唐突の感も否みがたいように思われます。

## 【書評】

原誠『スペイン語創出文法』（近代文芸社、2007年）

山村 ひろみ（九州大学）

日本におけるスペイン語学の重鎮である原誠氏のライフワークである「創出文法」が『スペイン語創出文法』として近代文芸社から出版された。

周知のように、原氏はマドリッド・コンプルテンセ大学でスペイン語音韻論において博士号を取得し新進気鋭のスペイン語学者として活躍するかたわら、独自のスペイン語文法の確立に着手した。ときあたかもチョムスキーの変形生成文法が言語学界に旋風を巻き起こしていた頃である。原氏の提唱する「創出文法」は、この統語部門を言語の中核とするチョムスキーの学説に敢然と否を唱え、言語にとって最重要な位置を占めるのは文意味部門であるという信念に基づき発展されたものであり、この観点こそが原氏の文法を当時からこれまで唯一無比のものとしてきた最大の特徴といえる。以下、この「創出文法」の核となる考えを簡単に紹介していきたい。

まず、なぜ原氏が「文意味部門」こそが言語の中核、つまり、言語の input と考えるに至ったかについてであるが、それは氏が「人間にとって、表現しようとする思想を持ち、それを言語記号、音韻に置き換えていくことこそ言語の自然な発話プロセスだ」と考えていることに因る。この「文意味こそ言語の中核である」という信念に基づき独自のスペイン語文法を提起してきた原氏であるが、その理論を具体的に開陳した本書の構成は、第一部「スペイン語創出文法概説」、第二部「スペイン語創出文法の実践的考察」、第三部「結びに代えて」から成る。原氏自身も指摘しているように、「創出文法」が何たるかを知るには、その主要概念である「運動」「第一次運動修飾要素」「第二次運動修飾要素」「文意味修飾要素」「準第一次運動修飾要素」「指定要素」について書かれた第三部第一章と第二部第三章から紐解くのがよからう。これらの概念はどれもスペイン語に対する氏の長年の深い洞察に基づくものであるが、中でも、「運動」と「第一次運動修飾要素」については特に、触れておかねばなるまい。

「運動」とは「創出文法」の中で最も重要な概念であり、文意味の中核をなす必須要素、すなわち、通常主動詞の意味に対応するものである。そして、「創出文法」の記述法である針山図においては2つの漢語から成る名詞によって同図の中心に記述される。「運動」

が動詞ではなく「漢語」によって示されるのは、文意味は動詞以外の、例えば、間投詞一つから成る発話によって示されることもあるという原氏の考えに基づくものだが、このように動詞なしの発話も「文」として扱おうとする態度こそ原氏の文法の独自性を際立たせるものである。次の「第一次運動修飾要素」とは、この「運動」にとって必要不可欠なもののすべてのことであり、針山図では針山から直接出る短い針によって示される。この「第一次運動修飾要素」として認定されるものとしては「格」「時制表示」「その他の第一次運動修飾要素」があるが、特に重要なのは「格」であろう。「格」の規定はどの言語においても常に大きな問題となるが、現在原氏はスペイン語に 22 の格を認めている。また原氏の「時制表示」についての解釈も看過できない。氏にとってスペイン語の「時制表示」は一般に考えられているような文意味を修飾するものではなく、専ら主動詞が示す「運動」のみを修飾する要素と規定されているからである。このように「時制」(形式)を文全体を修飾するものとはしない考え方は、「時制」をいわば「副詞」として扱おうとする最先端の時制理論と通じるところがあり、評者には大変興味深く思える。

以上、「創出文法」の一端を垣間見た。しかし、その真髄は、実は、本書で展開されている実例分析にこそあるというのが評者の率直な感想である。というのも、原氏による詳細な実例分析を追体験することにより、読者は一つの言語の文法を確立することの困難と喜びがどのようなものであるかをまさに実感することができるからである。その意味において、本書は現在スペイン語学を目指そうとする若き言語学徒にこそ推薦したい一冊である。

## 【新刊紹介】

*Luna en la hierba* (medio centenar de poemas japoneses elegidos, traducidos y comentados por Aurelio Asiain), Madrid, Hiperión, 2007.

『ゴヤの手紙：画家の告白とドラマ』(大高保二郎・松原典子編訳)、岩波書店、2007

大泉陽一『未知の国スペイン：バスク・カタルーニャ・ガリシアの歴史と文化』原書房、2007

大村香苗『革命期メキシコ・文化概念の生成：ガミオ-ボアズ往復書簡の研究』新評論、2007

岡田裕成・齋藤晃『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋大学出版局、2007

カストロ、ロサリア・デ『我が母へ』(桑原真夫訳)、沖積舎、2006

ゴメス・デ・ラ・セルナ、ラモン『グレグリーア抄』(平田渡訳)、関西大学出版部、2007

サンタカナ・イ・トーラス、カルラス『バルサ・バルサ・バルサ！ スペイン現代史とフットボール1968-78』(山道佳子訳)彩流社、2007

芝修身『真説レコンキスタ：(イスラームVSキリスト教)史観をこえて』書肆心水、2007

高垣敏博監修『西和中辞典 第二版』小学館、2007

立石博高『世界の食文化14 スペイン』農山漁村文化協会、2007

寺尾隆吉『フィクションと証言の間で：現代ラテンアメリカにおける政治・社会動乱と小説創作』松籟社、2007

中丸明『スペイン、とっておき！』文春文庫、2007

西川和子『スペインの貴公子フアンの物語：レパント海戦総司令官の数奇な運命』彩流社、2007

パス、オクタビオ『もうひとつの声：詩と世紀末』(木村榮一訳)、岩波書店、2007

原誠『スペイン語創出文法』近代文芸社、2007  
坂東省次・堀田英夫『スペイン語学小辞典』同学社、2007  
福岡スペイン友好協会監修／川成洋・坂東省次編『スペインと日本人』丸善、2006  
ベガ、ロペ・デ『オルメードの騎士』（長南実訳）、岩波書店、2007  
ペレス・レベルテ、アルトゥーロ『ジブラルタルの女王』（上・下、喜須海理子訳）、二見書房、2007  
六田知弘（写真集）『ロマネスク 光の聖堂』淡交社、2007  
柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』エディマン／新宿書房、2007  
山本紀夫編『世界の食文化 13 中南米』農山漁村文化協会、2007  
ラモネダ、アルトゥーロ『ロルカと二七年世代の詩人たち』（鼓直・細野豊編訳）、土曜美術社、2007  
リンド、エルビラ『ぼくってサイコー！？』（とどろきしずか訳）、小学館、2007

### 【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。特に分野は問いません。下記のような項目など、スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

- ◇ 国内外の学会の案内と報告
- ◇ 国内の学術講演会・行事の案内と報告
- ◇ スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
- ◇ その他

（使用言語：日本語またはスペイン語）

（原稿分量：1000～1400 字程度）

### 【編集後記】

『会報 12 号』をお届けします。今回はそれほど間隔をあけずにお届けでき、ほっとしております。ご多忙中にもかかわらず、原稿執筆を快諾くださり、文字通り玉稿をお寄せくださった先生方、協力してくださった理事の皆さま、庶務委員の方々にも前回同様、心より感謝いたします。

すでに新聞報道等でご存じのことと思いますが、去る 8 月 11 日に東京外国語大学名誉教授の荒井正道先生が、肺炎のため 91 歳でお亡くなりになりました。ベッケル、ヒメネス、ダリーオといった詩人たちの流麗な訳で名高い荒井先生は、「スペイン語の詩歌百選」の構想を長年温めておられ、理事長の職にあられた財団法人日本スペイン協会の機関誌などに名詩紹介の連載をお持ちでした。訳文の彫琢に尋常ならぬ情熱を傾けられたことも一因で、生前の刊行はかありませんでしたが、美しいイラストつきで年内には出版される見通しだそうです（同協会常務理事・江崎桂子さんのお話）。私たちへの掛け替えのない贈り物になることでしょう。

故長南実先生もまた、そのような贈り物を遺して下さっていたのは、うれしい驚きでした（ロペ・デ・ベガ『オルメードの騎士』岩波文庫、2007 年 8 月刊）。長南先生を偲ぶ会で小耳にはさんだ話ですが、先生が出版社に渡される訳稿はすでに完璧なもので、校正刷りに手を加えられることは一切なかったそうです。先生の温顔をなつかしく思い浮かべ、息づかいを感じながら味読したいと思います。（竹村文彦）